

4回目を迎えたシンポジウム。今回はトレイルランニングに焦点を絞った議論が行われた。

2014年1月13日(祝) 東京都立正大学
森を走ろうシンポジウム

山西イズム

2010年からスタートしたこのシンポジウムの第4回が1月13日に開催された。

現JOA会長の山西さんは、1980年代の市民ランナーの「教祖」とも呼ばれた存在だ。しかも、鳥取砂丘のそばで幼少時代を過ごした山西さんは、自然の中で走る楽しさや意義を当時から提唱していた。

鏑木毅を新約聖書、下島溪を旧約聖書とするなら、山西さんはさしずめ死海文書だ。その教えは、四散してその後の自然の中でのランニングに深く織り込まれている。そんな山西さんが、現在のトレランブームの初期からそのあり方に疑問を感じ、同じフィールドを舞台にするスポーツとして何か一石を投じられないか、と僕に相談したところからこのシンポジウムがスタートした。

そのころの山西さんの不安は、杞憂ではなく、残念ながら現実のものとなりつつある。View from Orienteeringの今月号の内容でも触れたが、トレイルランニングに対する規制条例が鎌倉市では成立する見通しである。昨今のオリエンテーリング大会中止や大会開催への抗議行動などの発生を考えると、このような条例は決して対岸の火事ではない。スポーツの内部から自律的にレースや自然との関わりを考え、またそれを次世代に文化として伝えていく必要がある。オリエンテーリングの初期には、地域クラブがその役割を担っていた。今、トレランに求められているのは組織化ではないだろうか？それが今回のテーマだった。

交錯する思惑

冒頭は山西さんの貴重講演からスタートし、パネリストとして以下の人が話題提供を行った。鏑木毅さんは地域

や社会に対するトレランの果たせる役割、千葉達郎さんは伊豆で昨年からはまった新しいトレラン大会の具体的な地域へのインパクトの紹介、村松さんがアメリカの自然公園の父の名を冠したジョン・ミューアトレイルでは一日の予約利用数が60人に限定されていることから、利用者側にもっと自己規制の考えがあってもいいのではないかという提案が、また村越からは愛好者のライフサイクルという視点で見たときの組織の必要性、そして日本山岳協会の八木原さんからは、日本山岳協会でのトレランに関するルール作りの報告があった。その後は会場からもいろいろな意見が寄せられた。活発なディスカッションが行われた。

パネリスト、あるいはフロアの参加者の思いは必ずしも一致したものではなかった。組織化ではなく、個人の道徳的意識の問題であると考えられる人もいれば、活動者のつながりを強く希望する人まで、思惑は様々だ。それ自体、ここまで発展したスポーツの組織化が一筋縄ではいかないことを如実に示している。これもまた、シンポジウムを開催した意義だったのではないかと思う。山西さんの呼びかけで緩やかな連絡協議的組織化をしようという提案で、シンポジウムは締めくくられた。

山岳界との連携

個人的な意義は、トレランのルール作りをして、一種目として扱おうとする山岳協会の考えが聞けたことである。登山には登攀（ロープなどを使い急な岩場を登る技術）、体力、そして地図を見て間違いなくルートをとるナビゲーション技術が必要だ。このうち、現在国体種目として採用されているのは、登攀技術を問うクライミングのみである。それで、登山関係者はいいのだろうか？体力やナビゲーションスキルも含めた総合的な競技を国体の中で実施したいというのは、潜在的には多くの伝統的な登山者にもあるのではないだろうか。登山界の潜在的な考え方にも耳を澄ますことが、オリエンテーリングの普及や国体種目への近道なのかもしれない。



熱心に討議を続けるパネリストとフロア。発言者は大里JOA理事。パネリスト(右側)は、手前から八木原日本山岳協会副会長、村松氏、鏑木毅氏、千葉達郎氏、山西哲郎氏



フロアからも貴重な情報が寄せられた。

(村越 真)